
魔法少女リリカルなのは～遥かなる悟空伝説～

群雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは遙かなる悟空伝説

【Nコード】

N1124BA

【作者名】

群雲

【あらすじ】

一星神龍との戦に決着をつけた悟空が神龍と一緒に消えた先は・
・そんな物語始まります

異世界（前書き）

どうも、新参の群雲ですこんにちはッス
とりあえず悟空、異世界突入編です

異世界

第一話 異世界

「これ以上ドラゴンボールを使わせる訳にはいかない」

世界の危機を救った戦士たちに目の前な緑色の巨大な龍は告げる。
いままでことあるごとにその龍の持つ奇跡と呼べる力に助けられ頼
ってきた、

それがこんな銀河系未曾有の危機に陥るとも知らず

「さあ、いくぞ孫悟空」

そしていざなう、これまで五十以上の年月にて幾度も世界を救って
きた男、孫悟空を

「ああわかつてる、じゃあオラ行ってくる」

「父さん行くつてどこに!」「カカロット…貴様!」

困惑する仲間たちをよそに男は目の前でその巨大な頭部を差し出し
ている緑色の龍「神龍」にむかつていく

「バイバイみんなー」

神龍の頭部に乗つかるとそのまま手を振りながらまるで『また明日
遊ぼうな』といわんばかりな笑顔で神龍とともに大空へと消えてい
った。

「なあ神龍、オラちよつと寄り道してえんだけど」

そう神龍に『頼み』を言った悟空はそのままかつて競い合った友、
そして殺し殺された友に会う。

そしてまた空を昇っていく、雲を超え、神の神殿のある天界を超え
た頃

「神龍つてあつたけーなあ、オラなんか眠くなつちまった」

だんだんとぼやけていく視界、徐々になくなっていく身体感覚に
悟空は神龍に乗ったまま目を閉ざした

鳴海市のとある公園

時刻は朝5時を過ぎた頃、日が昇り始め、あたりを薄く照らし始めた頃だった

毎日の日課としてランニング途中の公園で稽古をしていた親子がいた一人は大学生くらいの若い青年、高町恭也
もう一人はその父親である高町士郎である。

「父さん、次こそ一本取ってやるからな」

「はは、まだまだお前には負けられんからな手加はなしだぞ！」

「その自信も今日までだぜ父さん」

「よし、いくぞ！」

いざ始めようとしたその時である、急にあたりが暗くなったのである
「なっ、どうなってんだこれは朝だつてのに真夜中みたいに暗くな
つちまった」

「きよ、恭也！あれを見る！」

あたりが真っ暗闇に包まれたことに驚いた恭也だったが、それとは別のものに驚いた士郎がそれをかき消すかのように恭也を呼んだ
龍がいた。西洋の物語に出てくるような胴体に手足があるというのではなく、胴体はとて長く東洋の伝承にあるような巨大な緑色の龍であった

「.....」

さつきまで稽古だと意気込んでいた恭也は目の前に広がる非現実な光景に言葉を発せずにいた

士郎の方も言葉すら出なかったものの恭也よりは冷静であった、彼は見逃さなかったのだ目の前の龍からなにか小さいものが下りていくのを。それを見つけた瞬間、龍は激しい閃光を放ち消えてしまった
「父さん龍が.....」

「ああ消えてしまったな.....」

そう返した士郎は突然歩き出した、なにかに引き込まれるように龍

が居たほうへと

異世界（後書き）

えーやっちゃんいました

とりあえず悟空たちのからみは二話

戦闘は三話からッス

ではではまた

交差する(前書き)

とりあえず勢いにかまけて第2話
とりあえず話すすまねえ

交差する

第二話 交差する

公園の裏にある雑木林の奥

「待つてくれよ父さん」

「.....」

高町父子の二人はひたすらに進んでいた、正確には黙々と歩いていく父である土郎に息子の恭也がついて行っているのだが。

「父さん！」

「.....」

先ほどから恭矢の呼びかけにも無反応の土郎は周りを見渡ししながら数歩あるいた後その足を止めた

「.....恭也」

「なっ、なんだよ」

恭也は先ほどから返事がなかった父親から急に声をかけられ戸惑ったがすぐに持ち直し

「さっきの龍なんだが、あるとき小さい光のようなものが龍の頭から降りていったような気がしたんだが.....おまえもなにか見なかったか？」

「?なにかつて、そんなもの.....!!」

ガサガサ

首をかしげながら返答に困っていた恭也であつたが後ろの茂みから物音が聞こえ、すぐさま臨戦態勢に入った。

「もしかして父さんが言つてた奴か!? 突然夜になつたりいきなりでけえドラゴンが出たり、もう何が出てきても驚かねえからなあ!」
構えを取りながら朝から起こったき奇妙な出来事にやや愚痴るように言い放ち今現在も音のする茂みを睨みつけている

「恭也! 少し冷静になりなさい」

そういう土郎だが息子と同じく先ほどの体験が多少なりとも尾が引いているのだろうか、眼光は普段の稽古以上に鋭くそこに纏う空気もかなり張りつめたものだった。

ガサガサガサガサ「……………」

音は激しさを増していき二人の緊張の糸は徐々に張りつめていったそして

ふわふわ

「……………」

ふわふわ

「……………は？」

現れたものに二人はそろってまさしく文字どおり「氣」の抜けた声を出した

そこには一人の少年が『あお向けに横たわっていた』、

気を取り直して高町家の大黒柱である土郎がその少年を「観て」みようと思った

歳は背格好から見て10歳前後だろうか末子の「なのは」とあまり変わらないくらいだ。

胸元の に亀の字が入った山吹色の変わった道着、ここら辺の道場ではまず見ないだろう。

そしてそのわきには少年のものであるう赤い棒と中に赤色の星が4個入ったオレンジ色の水晶が転がっていた

ここまではいい、そうここまでならただの迷子として警察に届けを出すなりすればいい

だが問題はこの少年の「状態にある」

今この少年は『あお向けに横たわっている』のだ、この状態でなぜこちらまで近づくことができたのか、それは

「父さん、俺はさっきからの騒動は実は夢なんじゃないかって思う

んだが」

「恭也．．．父さんも同じことを考えたところだ、だが実際に起きてしまってるんだから仕方がない」

二人の目線は同じところを向いていた、少年の背中．．．いや今少年を支えているものにくぎ付けになっていた

「．．．．．」

先ほどと同じようにだが違う意味で生唾を飲み下した二人だがついに動いた

「．．．．．ふわふわだ」

そう仰向けになつて眠っている少年を支えている『雲』にふたりは同時に吸い込まれるように触れてみたのだ

「どうなつてんだ？綿みたいにやわらかいのにそれでいてある程度の弾力がある」

右手で押ししたり引いたりを繰り返す恭也

「黄色い雲なんて見たことも聞いたこともない．．．いやでもどこかで？」

考え込みながら両の手で撫でている大黒柱の士郎、二人が雲について考えてると突然雲が動き出した

二人が見ている中、その雲は少し離れた位置まで移動すると全身をくねらせるように動いていくすると『ドサ！』という音を立てて少年を地面に落とした

「何してんだあいつつてこら、やめろつて」

状況がいまいちつかめない恭也、だが雲がいきなり恭也をその全身を使って少年のほうへと押し出していく

「おいやめろつて！くそなんでこんなに気持ちいんだああ押すなあ
！！」

「そうか、そういうことか」

目の前のやり取りを眺めていた士郎は雲の行動にある一つの答えを導き出した。なるすることは一つ、士郎は雲の前まで近づきそこで片ひざを着き雲の上にやさしく手を置くと

「君はこの子を私たちに託そうとしているんだね？」

士郎はまるで子供をあやすように声を出した。

雲は士郎の周りをグルグル回るとも似た位置で数回跳ねた、それを見た恭也は

「なんか犬みたいだなやつだな、まるで雲には見えない」

などと微笑みながら雲を撫でていると

クオーン　バヒューン

まるでよろしくといった感じに雲は遠くの空に飛んでいく、それを眺めた後ふたりは少年を見つめて

「しかたない、あの人懐っこい雲に免じてとりあえず家まで運ぶか」

「父さん」

すっかり癒された二人はその少年を運んでいく

なのはSIDE

わたし、高町なのは9歳。私立聖祥大付属小学校の3年生、昨日友達のアリサちゃんとすずかちゃんとでケガをしていたフェレットを動物病院に連れて行ったんだけど

病院の先生から飼い主さんのことを聞かれたときにみんなで探してあげられないか、それがだめなら私たちのだれかが飼ってあげられないかという話になったのですが、アリサちゃんは犬を飼っているからだめで

すずかちゃんは猫を飼ってるからだめみたいです。なのでわたしは今日お母さんたちに相談してみることにしました

「おはよう」

「ギャー」

二階の部屋から一階に降りたとき、道場のほうからものすごい悲鳴が聞こえてきました
急いで駆け付けてみると

「なんだおめえぜんぜんよわっちなあ」
「ぐっく、こんなはずじゃ」
「まったく、油断しているから情けない」
「お父さんとお兄ちゃんとおと．．．」
「ん？おめえだれだ？？」
知らない男の子がいました

S I D E E N D

時はさかのぼり、なのはが起きる1時間前

「「ただいま」」

高町家に父子は帰ってきた

兄、高町恭也の背中には例の雲から預かった少年が背負われていた。

父、高町士郎が扉を閉めると家の奥からパタパタと音が聞こえてくる

「お帰りなさい恭也、あなた」

迎えた人物は高町桃子、このいえの中心人物といっても過言はない
というくらいの権力を持つひとである、二人を出迎えた桃子であつ
たが恭也の背中を見ると

「あらあらあら」

なにやら嬉しそうに笑い始めた

士郎はこの顛末をある程度かいつまんで説明した。巨大な龍のこと、黄色く人懐っこい雲のこと、そしてこの少年を家で引き取らな
いかというはなしを

「とにかくまずはこの子が起きてからなのだがな」

士郎は少年のいる道場を見つめながら言う、なにせまだどんな子な
のかどころか名前すらわからないのである。

「うん．．．ん？あれ、オラどうしたんだ？なんか夢え見てた
気がしたんだけどなあ」

目を覚ました少年はあたりを見渡して

「どこだ？ここ」

一面木造の部屋なのだがやけに広く見慣れない部屋に首をひねっている

「おっ目が覚めたか！」

「ん？」

一人の青年が部屋に入ってきた、恭矢である。恭矢は少年に近づき目と目を合わせた

「よう、気分はどうだ？」

「おう、悪くねえぞ」

「えーと俺の名前は恭也、高町恭也おまえは？」

「オラ、孫悟空だ！」

「へ？」

順調な会話のキャッチボールだったのだが少年・・・悟空の名前を聞いた恭也の言葉が止まった

「すごい名前だな」

「あつ父さん！」

ついで入ってきた土郎の言葉で恭也の止まった時間は動き出した

「きみは悟空君というんだね、すこし話したいことがあるんだがいかな？」

「ん？オラ別にかまわねえぞ」

道場に悲鳴が上がるまであと30分

交差する（後書き）

悟空の装備品なりなんなりと突っ込みどころありますが
4話か5話くらいにほのめかしくんで今のところ説明なしです
とりあえずこんな文章ですが感想待ってます
ではまた

とりあえず飯だ（前書き）

一応予告した戦闘回です．．．イチオウ

えつと悟空となのはが遭遇したってことで今回からあとがきを悟空となのはの掛け合い風の次回予告にしてみようかなと思います

不愉快だと思っただ方はどんどん言ってくださいねやめますから（泣き）

ではどうぞツス

とりあえず飯だ

第三話 とりあえず飯だ

「では改めて自己紹介から行こうか」

道場に入ってきた土郎は悟空の目線近くまでしゃがみこむとにこやかに笑った

「私の名前は高町土郎、この家の主だとおもってくれ」

そういうと恭也のほうをみると

「さつきも言ったが俺は高町恭也だ」

二人は言い終わると悟空のほうを向く、すると悟空はおもむろに立ち上がり張り手の形にした右手を顔の位置まで上げ

「オッス、オラ孫悟空だよろしくな！キョウヤにシロウ」

すこしだけ発音がずれた感があるが屈託のない笑顔で二人に返す悟空、それを見届けた二人はお互い見やっていた

((初対面でいきなり呼び捨てか・・・))

二人はそう思ったのである

「じゃあ悟空君きみは「そういうえばお前なんであんなところで倒れてたんだよ？」おい恭也」

もう少し話に弾みをつけようとしていた土郎は息子のせつかちな質問にすこし頭を抱えた

「ん？オラ目が覚めたらここだったぞ」

「じゃあその前は どうしていたのかな？」

「えっとピッコロ大魔王を倒して、神様んところでごん？」

ここに来る前のことを思い出そうとする悟空だが、神殿での出来事あたりから頭にもやがかったような感覚を覚えて頭を捻る。そんな悟空を見た土郎は

「思い出せないなら無理をしなくていい！父さん！こいつ今とんでもないこと口走らなかつたか？！」恭也いい加減にしなさい」

悟空の口から出た大魔王に神様という単語に力のいっぱい突っ込んだ恭也を咎めた土郎だが、その内心では驚愕が渦巻いていた

「恭也、今朝のことを思い出してみるんだ」

「・・・たしかに今朝のあれはすごかったけどさすがに神様だなんて」

今朝みた巨大な龍を思い出し今までの自分の中の常識の幅をかなり広げた恭也だが、さすがに神や魔王という単語には正直、素直には呑み込めない

「ん？なんだキョウヤ信じらんねえんか？」

「そりゃあなさすがに無理だろ、もし本当なら悟空おまえはその大魔王より強いってことだろ？悪いがとてもそんな風には見えないな」
えっなんで？という顔をする悟空にいやいやないという風に返す恭也だが次の悟空の言葉でその表情を一変させる

「じゃあいつちよオラと戦ってみるか」

「ではこれより時間無制限一本勝負を始める、先に相手に一撃を入れたほうが勝ちだ、ただし急所は狙わないこと」

悟空の提案により急遽はじまった恭也と悟空の試合だが当の本人である悟空は木刀を構えた恭也を見るとおもむろに右手を背中に伸ばす・・・のだが

「あれ！ない！ないないないない！！」

「??？おいどうしたんだよ悟空」

「なあ如意棒しらねえか？如意棒！これっくらいの赤い棒なんだけだよお」

背中に回した右手を二回ほど空中で握っては閉じる動作をして突然騒ぎ始めると自分の両腕をいっぱいに広げては目の前の恭也に尋ねる
「如意棒？」

そんな中土郎は悟空の如意棒の発言に首をひねっていた

「あっ！あつたー」

道場の奥に立てかけてあった赤い棒きれを見つけた途端走りだし右手でそれをつかむと

「よっ！ほっ！はっ！あーらよつとお」

自分の目の前で棒の中心を起点にして回転させると次に両腕でもって右に半回転させて左に持って行っては半回転させ、仕上げに頭上で回転させた後に左手を前側に右手を自分の右胸の前に持つていくと戦闘態勢を整える

「それが如意棒か？」

「おう、そうだぞ！じっちゃん gave くれたんだ」

「．．．よし、では二人とも準備はいいかな？」

「おう！」

「では．．．はじめ！！」

いま、当人たちの知る由ではないが異世界の住人の戦いがはじまぐおお！！！！」

った瞬間におわった

「ぐつく、こんなはずじゃ」

「なんだおめえぜんぜんよわっちいな」

「まったく油断してるから情けない」

試合が始まった瞬間、まず恭也は悟空との間合いを測り实力を見る意味もこめ、牽制に突きを放つ

この間わずか0.8秒

対して悟空は慣れ親しんだ自分の相棒ともいえる得物に『あの』キ

ーワードを込める

「伸びろ如意棒」

前に突き出していた如意棒はそのまま吸い込まれるように恭也の腹に「ぐおお！！！」当たった

ちなみにこの間わずか0.6秒である

この出だしの差により突きのために一步踏み出した恭也の腹に棒を設置しておく構図となり、結果

腹を押さえて悶絶している恭也ができあがった

その光景をみて眉間に少しだけしわを寄せながら首をかしげる悟空だったが、いきなり道場の入り口のほうに首をまわした

「もう起きたのか、おはようなのは」

「おはようお父さんにお兄ちゃん．．．えっと」

「おつす！オラ孫悟空だ」

「えっと、わたし高町なのはっています」

士郎とその横で片膝立ててうずくまっている恭也に挨拶をしたのはだが、見ず知らずの少年に戸惑っていると向こうからの自己紹介に釣られてしまう

「おい悟空！なんだその棒は！！反則だろ」

「っ！どうしたのお兄ちゃん？」

突然怒鳴りだす恭也に思わず身を引いてしまうのは、このとき恭矢の顔が少し申し訳なさげになった

「恭也、悟空君とりあえず『ぐぎゆるるる』何の音だ？」

『ぐごりゆりゆりゆりゆり』

先ほどよりも重低音がかかった唸り声に怪訝な顔をする士郎と恭矢であるが、なにか怪物の鳴き声を彷彿させる謎の音なのは少し腰が引けていた

「『ごご』いつたいなんなんだ？」

三人が声をあわせて音の出処をさぐっている

「うう、もうだめだ」

いままでの元気の良さと打って変わって床に座りだし足を放り投げる悟空、それを見た士郎はどこかケガでもしていたのかと思いをかけようとするが

「オラ腹あ減っちゃったあ！！」

「『ごご』あらら」

あまりにも能天気な悟空の一声により三人はズッコケてしまった。

「まったくしょうがない、いろいろ聞きたいことがあるがとりあえず朝ごはんにしよう」

「ほんとか！いやっほ〜」

ズッコケたままの土郎の朝食宣言に悟空はその身に余る喜びを表すように飛び上がった

それを見ながら三人は立ち上がると飛び跳ねながら小躍りしている
悟空を連れて、道場を後にした

とりあえず飯だ（後書き）

悟「オッス！オラ悟空」

なの「わたし高町なのは、いまのところ極々普通の小学3年生」

悟「目え覚ましたら全然しらねえところでオラびっくりしたぞお」

なの「わたしも突然知らない男の子がいてその子が急に怪獣みたいなおなかの音をだすからびっくりしちゃた」

悟「ははは！わりいわりい、ところでよお次回はついにあれだな？」

なの「うん！ついにわたしが・・・」

悟「ついにめしの時間だ！やっぱりめし食わねえと力入んねえかな！」

なの「ちがうよ！次はわたしが」

悟「次回！魔法少女リリカルなのは！遙かなる悟空伝説！第4話
なのは危機一髪あらわれた怪物」

なの「あゝ！勝手に進めた！！」

悟「ところでよおなのは？イタチって結構つめえんだぞ！」

なの「その子はだめえ！！」

なのは危機一髪あらわれた怪物（前書き）

悟空の二人称をとりあえず漢字の人はかたかな
それ以外はそのままで行こうと思います
ではどうぞ

なのは危機一髪あらわれた怪物

第4話 なのは危機一髪あらわれた怪物

高町家 リビング

ここはいま一つの戦場と化していた

響き渡る轟音

燃え盛る炎

飛び散る火花

どれをとつても決して一般家庭の、それも朝食時に会っていいものではない…はずである

「おはよーってなにこれ？」

リビングに入ってきたのは高町家長女である高町美由希、普段の彼女はもつと早くに起床しているはずなのだがある理由でついさつき支度を済ませたのである

「おはよーおねえちゃん」

「おはよう美由希」

「お！ようやく起きたか美由希」

「……………」

上からなのは、士郎、恭也の順で挨拶が返ってくる。だが現在リビングにいる人数は美由希を入れて六人、その後二人ほど足りないのであるが今の美由希には些細なことだった今一番その思考を占めているのは

「……………」『ゴオオオオオオオ』

テーブルの奥でうつ伏せになり指ひとつ動かさずに怪物のような騒音を絶賛演奏中の少年であった

「悟空君、もうすぐ出来上がるからがんばって！」

「オラあもう限界だぞお……………」

「わ！しゃべった」

キッチンで調理中である高町家オーナーシェフである桃子は悟空を

励ましながら普段出さないような速度に技術そして大量の材料を思う存分駆使していた。

「ていうかお母さん朝からこんなに作ってどうしたの!？」

朝食、というより晩飯の量ですら遙かに凌駕している食卓に並んだ食事に美由希は思わず声をあげた

「お母さん、悟空君のおなかの音を聞いた途端にいきなりこうなっちゃって」

「おなかの音？」

『G O O O O O O O O O』

「今がそうなんだけど」

「え？」

なのはが美由希にこたえるとつつ伏せになっている少年、悟空から戦闘機ばりの轟音が鳴り響いていた

「こいつの腹ん中にはいったいどうなってるんだか」

朝からの騒動のせいか割と冷静な恭也と

「おかーさんがんばれー」

先ほどまでの雰囲気や嘘のように新婚気分バリバリの土郎であった

「……………いただきまーす……………」

ついに完成した割と……結構……かなり豪華な食事に最初こそ胃もたれを起こしそうな顔をしていた高町兄妹だったがそれをすくぐにぶち壊す光景がテーブルのおくにあつた

がつがつがつもりもりもりもりごきゅごきゅごきゅ

「ふふえーふおふおふおふおふえー」

「ごっ悟空君、ちゃんと呑み込んでからしゃべりなさい」

「んぐっんぐぷはー！モモコーおめえ料理うめえなー」

「あら ありがとう悟空君」

食べながらしゃべる悟空を注意する土郎に料理をほめられご機嫌な桃子、だがそれを眺めてるテーブルの向こう側の兄妹はというと

「……なんていう食欲」「」
目の前で繰り広げられている惨事に思わず箸を止めるのであった
ちなみに食い終わった後の「腹八分目つてところだな」の発言には
だれも突っ込まなかったとか

「……いつてきまーす」「」

食事が終わり高町兄妹がそれぞれ学校に行った後、リビングには土
郎と片付けを終えた桃子と腹を風船のようにふくらませた悟空がいた
「さて悟空君、改めていろいろと聞きたいことがあるのだけどいい
かい？」

「ん？なんだ？」

話を切り出した土郎であったが何を聞けばいいのか一瞬考え

「まずきみはどこに住んでいたんだい？」

とりあえず無難な質問にしてみた

「オラか？オラあ『パオズ山』つてどこに住んでた」

「『パオズ山？』」

まったく聞いたことのない山の名前に土郎と桃子は怪訝そうな顔を
した

「おうつそうだぞ！そこでじっちゃんと二人で暮らしてたんだ」

「えっ！おじいさんとふたり？ほかにご家族の方は？」

じっちゃんと二人という言葉に土郎は驚き

「？オラ家族いねえぞ、オラが赤ん坊のころ山に捨てられてたのを
じっちゃんが拾ってくれたんだ」

続いて発せられた言葉に二人は凍り付いてしまった。そんな二人を
見た悟空はというと

「そんなことよりさあキョウヤたちはどこ行っちゃったんだ？」

先ほどそろつて出かけた高町兄妹の行方をきにしていた、そんな『
なんでもない』様子の悟空を見て桃子は

「お、おわあ〜くすぐつてえぞモモ」

悟空を自分の膝の上に座らせて微笑みながら頭を撫で始め

「よし！」

それを見た士郎は意を決したように声を上げると

「悟空君、今日から君はうちの子だ！！」

そう高らかに告げたのであった

そして夜

嵐のような晩飯どきを乗り越えた高町家はもう皆が就寝の準備に入ろうとしていたのだが士郎の「みんなに大事な話がある」の一言でリビングに集合することとなる

フェレットのことで頭がいっぱいだったなのはもこれに乗じて．．．とは言わないまでもきっかけになればとリビングの椅子に座った

「じつは悟空君をうちで引き取ることになった」

士郎の一言に桃子と恭也は予想通りという顔を

「ええええええ」

残りの姉妹は二人そろって驚愕していた

なのはの部屋 この部屋の主はついさっきの衝撃発言のせいで失敗した作戦？についてなやんでいた

「はあ〜どうしよう、結局言えなかった」

ねが．．．すけ．．．

「えっ！」

nがい．．．．．tけて

頭に響いてくるその声を聴いた途端、なのはは服を着替え始めた

リビング

「悟空くんお風呂入っちゃいなさい」

寝る前の修行と言っていつまでも風呂に入らずに型の修行をしていた悟空は桃子の勧めでいい加減終わりにしようとしたときである

g . . . s k t お い
「ん？」

突然響いてきたこえに首を傾げていた

「はっはっはっは」

動物病院前 そこは昨日みたときと比べてとんでもなく変わっていた
敷地内の木は倒れ、地面はえぐれている

「はっはっはっは」

そして何より違うのは

「なんなのあれ〜」

今現在全力疾走中のなのはの後ろを追走する黒い化け物がいるとい
う点である

「あれはジュエルシードという石が周りの思念だけを取り込んで物
質化したものです」

「わっつっ！しゃべったー」

左手に抱えているこの間から気にかけているフェレットがしゃべり
始めたことと驚いたなのはだが構わず話を続けた

あれに対抗できるのは魔法だけ、その力をなのはが持っていること、
そして

「お願いします、力を貸してください！お礼はします必ずします」

「で、でもキャッ！」

話に集中していたなのはは派手に転んでしまった

そこを黒い化け物が見逃すはずもなく、爪の形をした腕ともいえない
いそれを

振り下ろした

「っ！ 」

もうだめだと目を閉じた二人だったが、いつまでたってもやっつてこ
ない衝撃に閉じていた目を開ける、すると

「おめえこんなとこでなにしてた？」

「ふえ？」

山吹色の道着に赤い棒を握りしめ、黄色い雲の上に乗っかっている
今日から家族になった男の子が
手に持った棒で怪物の一撃を受け止めていた

なのは危機一髪あらわれた怪物（後書き）

悟「オッス！オラ悟空」

なのは「突然響いてきた声に導かれるように病院に行ったのはよかつたんだけど」

悟「なのはって結構足遅いのな！ははっ」

なのは「これでも早く走ってるつもりなんだけど」

悟「そうなんか？よし！オラが鍛えてやる、この甲羅を背負ってとりあえずはしっぞ」

なのは「ええ無理だよう！じっ次回！！魔法少女リリカルなのは遙かなる悟空伝説！魔法少女誕生！！じゃあばいばい」

悟「じゅえるしーどってうめえのか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1124ba/>

魔法少女リリカルなのは～遥かなる悟空伝説～

2012年1月4日05時48分発行